

筑波 しらぎく

コロナ禍のさなかで

筑波大学医学医療系

解剖学・神経科学

武井陽介

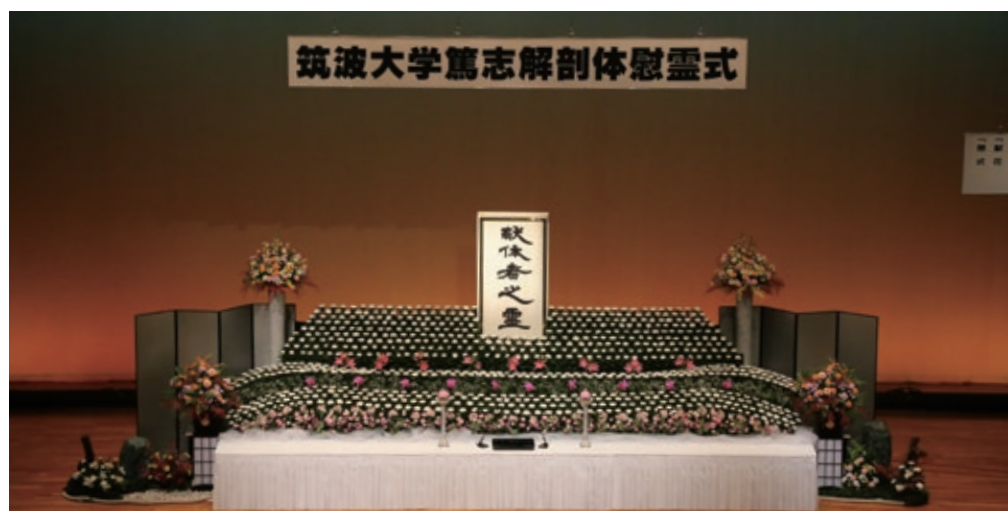
一昨年に始まった新型コロナウイルス感染症の流行は世界を覆い、いまなお私たちの生活に大きな影響を与え、先の見通せない状況が続いています。

筑波大学医学群も例外ではなく、昨年度の新学期から学生は自宅待機となり、オンラインの遠隔講義を視聴するという状態を余儀なくされました。その後、大学構内立ち入りが許可され、関係者の努力により対面授業が再開されました。現在、医学群の講義の多くは講義室での対面講義とオンライン受講を選ぶことができるようになり、以

前より学習しやすくなったという学生の声も出ています。

講義はオンラインを併用することで解決できますが、解剖学の実習はそうはいきません。医学を学ぶ者は入門の時期に解剖学を学び人間の身体の隅々まで理解し記憶しなければなりません。同時に、ご遺体に対する畏敬の念を持つて解剖学実習を行い、将来医療に携わるための『プロフェッショナルとしての死生観』をかたちづくるのです。こうした『学び』はオンラインではどうして達成することができません。どうしても本物の人体で実習を行わなければならぬのです。他大学では解剖学実習の中止あるいは内容を大幅に減らす措置をとったところもありましたが、筑波大学では上記の理由からコロナ禍下にあっても感染防御対策を施しながら

発行 筑波大学白菊会
茨城県つくば市
天王台1-1-1
解剖献体事務室
電話 029(853)3230
印刷 前田印刷株式会社
電話 029(875)6696



令和元年度慰霊式（祭壇）

字歴 題略 紙者 表筆

今井 凌雪（いまいりようせつ）
潤一 大正十一年十二月十九日生
立命館大学卒
前筑波大学教授（芸術専門学群）
日展評議員・日本書芸院常務理事・
雪心会主宰
朝日書道千人展メンバー・日展文部大臣賞・
朝日書道賞 芸術院恩賜賞受賞



筑波大学白菊会 第37回総会 令和元年10月9日

(令和2年10月14日開催予定の筑波大学白菊会「第38回総会」中止のため、令和元年度の白菊会総会の集合写真を掲載いたします)

らレベルを一切落とさずに解剖学実習を実施することに決め、以下のように進めました。

学生には、実習開始前二週間の健康状態を提出させ、問題ない場合のみ実習参加を認めました。密集した状態を避けるためにロッカールームの使用を禁じました。実習室入口にサーモカメラを設置し、毎日入室前に検温して発熱のないことを確認しました。消毒液を設置し、手指の消毒を義務付けまし



令和元年度慰霊式（学長挨拶）

た。実習中、学生と教員は不織布のマスクを常時着用しました。解剖実習室は空気中のホルマリン濃度低減のために強力な空調が装備されており、室内の密閉状態を回避するのに大いに役立ちました。以上のような対策のもとに昨年度、本年度と実習を行いました。期間中若干名の体調不良者が出たのみで、新型コロナウイルス陽性者を出すことなく、無事に実習を終了することができました。いつ大学が入構禁止になったり感染者が出て実習が中止になるかわからないという不安と緊張の下で行われた実習でしたが、学生たちの士気は総じて例年より高く、充実した実習を行うことができました。実習終了時、学生たちは達成感で一杯になっているようでした。白菊会ホームページ (<http://www.md.tsukuba.ac.jp/shiragikukai/>) に解剖実習の感想文が掲示してありますのでぜひご覧ください。学生たちの様子の一端をご理解いただけるのではないかと思います。

次に、白菊会運営に関する報告です。新型コロナウイルス感染拡大防止のためにやむをえずご遺体の引き取りを一時休止い

たしました（令和二年七月末日～八月末日）。また、昨年に引き続き、本年度も筑波大学白菊会総会と篤志解剖体慰霊式の中止が決定されました。この場を借りて深くお詫びを申し上げますとともに、ご理解をいただけますようお願い申し上げます。

コロナ禍も含め一寸先は闇といった世相のなか、解剖学の教職員一同、臨機応変に対策を講じつつ解剖学実習を継続してゆくために力を尽くして参ります。どうぞ、今後とも変わらぬ御理解と御支援をお願い申し上げます。



会員のみなさまからの便り

「親子でお世話に…」

有賀 文 貴

父母を送って十五年、今でも当時の事が脳裏に浮んでくる。息子の私は早い時期から、親を見送る方法の一つとして、献体がある事を知っていた。ある時両親にこういう見送り方が今はあるよと話し、興味を示した二人に献体の資料を取り寄せ、医学生の力添えになれるんだと説明した。父母は通常の葬儀を考えていたようだったが、私の説明に社会に役立てるならと得心してくれた。念の為、父母の親類、親しい知人にも説明し理解して頂いた。いざその時を迎えた時、手順に則ってスムーズな処理が後々迄行われ注視していた私は感動した。その後時期を見て私達夫婦も献体の手続きを済ませた。自分の子供達も祖父母の臨終に立会っているので献体について理解しており賛成してくれている。

親子二代の選択した行為が、医療技術の発展の一助となれば、こんな嬉しい事は無いと思う今日この頃です。因に、父の献体は居住の「市」の先駆者であったそうです。

「新型コロナの中を生きる」

大森 重 則

毎日報道でコロナの感染者数が出るのがあたりまえの日常になり、マスクをするのも普通の風景になりました。私の日常は、画廊を巡り美術館に行き感性を磨いています。

近代美術館で開催された、日本画の百五十年は素晴らしかったです。横山大観、小野竹喬、奥田元宋、東山魁夷、小川芋銭、等の有名作家達の名品に感銘を受けました。中でも、那波多目功一の寂光という作品に感動しました。水辺の葦が逆光を受けて、力強く立つ姿に、感動しました。良い絵画を沢山見たので、気持ちがとても癒されました。新型コロナの時代だからこそ、美

術はとても大切なものだと感じた一日でした。画廊の店員さんが言っていた、絵が売れなくてこまっているそうです。景気が良くなないと売れないですね。生活優先ですからね。私は、写真の方が忙しくて、春は新緑、桜の花、柳の新緑、菜の花と撮りまくっていました。

とても、充実した日々を送りました。堤防の田園風が近くにあるので、モチーフには不自由したことはありません。アングルを変えれば無限大の構図が作れるのです。光と影で作る風景は見ごたえがあります。季節は春夏秋冬の光が好きな光です。体が続く限り写真を撮っていきたいと思います。だから、ウォーキングと「きょうの健康」を読み体に良い物を食べてストレッチをすることが日課になっています。おかげさまで、糖尿病の方もヘモグロビンA1cも6.1から6.2%を維持しています。運動は嘘をつかないものです。仕事の方はコロナでだいぶ少なくなりましたけれど、毎日楽しく暮らしています。コロナで健康を崩している人が多いと聞いています。こんな時代だからこそ

美術に触れることは、とても大切なことだと思います。私は健康上すごく良い環境にいる気がします。良い趣味と理容師という職業を持てて仕合わせ物ですね。両親に感謝をして前向きに生きていこうと思う。

コロナ禍に思う

佐々木 利男

現在人類の最大の危機、コロナの世界的大流行は、果たして終息するのか？ 人間生活の根本を変革を迫られている様に思われます。従来の生活様式を変えることは、至難の業です。人間社会を営む上で欠かせない、人と人との関わりを否定する在り方はいかがなものでしょうか？ 人とのつながりが無ければ、人は存在は出来ない。コロナ禍という大疫病によって、私たちの生き方が厳しく問われています。

この理不尽な不条理な病を、人間の叡智によって、必ずや克服出来るものと、確信しています。

感謝の日々^{ひび}

平石 賀須子

年を取ると一日はあっという間に終わります。一年は言う迄ありません。私も何時の間にか九十六歳の高齢になり自分でも驚いています。ですが私の母は九十七歳迄ボケもせず全うしました。だから私も母に負けない様頑張っています。人間一つは趣味を持った方が良しとされていますが、私も十五年

位前から新聞投稿をやっている色々掲載をして頂き楽しい時もありましたが、今は見ての通り手が震え文章も思う様に書けなくなりやっと終止符を打ちましたが、其処に「しらぎく」さんから会員からの便りの要請があり此の様な状態ですが、書くのは此れが



令和元年度白菊会総会（懇談会）

最後だと思って頑張りました。今は息子との二人暮らしで食事は朝昼一緒に（朝はゆっくり横になっています）パンと紅茶で、夕食は今は有難い事に色々なお弁当があるので買って来て貰って食べています。長生きも色々経験出来て悪くないと思います。

でも去年からの「コロナ禍」で友人達共逢えず今は電話でのお喋りですが此れには限度があるので困っています。「コロナ」の一日も早い終息を願っている日々と成願の日まで毎日を感謝の心を忘れずに生きて行こうと思います。

解剖実習を終えて

石 橋 凌

解剖実習は医学生にとって避けては通れないものであり、その実習を乗り越えてこそ医学生になったともいえるだろう。

実習が始まった初日、身内ではない亡くなられた方を初めて目の当たりにした。周りの生徒達にはいつも通りふるまっていたが、内心では緊張が収まらず、メスを手にしてご遺体に刃を入れたときには感じたことのない複雑な感情が私の心を覆った。それは罪悪感なのか、恐怖なのか、はたまたそれらが混ざったものなのか今でもはつきりとは分からない。しかし、そのような感情も次第に薄れ、ご身体を提供してくださった方のためにも解剖学を学ばせていただいたこうという思いが大きくなった。そして、実習も進み病変があると思われる部位の観察となったとき、私はご献体くださった方の晩年の痛みや苦しみが身に染みて伝わった。亡くなられた原因が私の今は亡き祖父と同じであったこともあり、特

にそれを深く感じた。触れてみると明らかに感触が異なっていた病変、所々でみられた出血、腫れ上がったリンパ節はご献体くださった方が病と闘っていたということを私に痛いほど教えてくださった。「私の祖父もそうだったのだろうか」と幼い頃には知る由もなかったことに思いを馳せた。

そんなこんなで六週間におよぶ解剖実習を乗り越え、やっと医学生になれたのだと実感した。私は優秀という言葉とは程遠い存在であり、本実習に関しても一〇〇%理解できたなんて口が裂けてもいうことができない。そんな私ができることといえばご献体くださった方への感謝を忘れず、解剖実習という一生に一度の経験を糧に学問に励むことだ。

この実習の間は、六週間という期間がとても長く感じたが、この感想文を書いている今ではあつという間に過ぎ去っていったと感じている。実習を終えて部屋に帰り、復習と次の日の実習に向けた予習をして布団に入る生活の繰り返し。本実習のような長期にわたる実習を経験したことなかった自分にとっては、つらいと感じた時もあった。その分、実習を終えたときには、感じたことのない充

実感を得ることができた。この充実感を実習に携わる先生方や技術職員の方々、そしてなによりご献体くださった方がいらしてこそ得られたものであり、この場で大変恐縮だが心から感謝を申し上げたい。解剖実習に携わられた方々へ恩を返すためにも、この解剖実習で得た知識や経験のない感情を胸に、日々努力を重ねていこうと思う。

宇田川 惇

解剖実習が始まる直前まで、「一切学びに關しての妥協をしないので、医学を学ばせてほしい」と願ひ続けた日々のことを振り返っていた。後半は特に厳しいとの事であつたので、自分の誓いが破られてしまわないか少々心配であつた。実習が始まり自分が担当する御遺体と対面したとき、心配は杞憂に変わった。

一人の人間を解剖させて頂く責任と重圧は途轍もないものであつた。教科書や見聞きしたことて理解した氣になつていた人間を、自らの手と目で理解していかねければならなかつた。自

分が生きた以上の時間を経験した。誰かにとって大切な尊い一人の人間に手を加える以上、妥協してはならないと思いつながら日々実習に臨んだ。医学生というよりも一人の人間として責任を果たすために、生活のすべてを御遺体と人体の構造を理解することに投じた。「二度目はない」「御遺族と御献体くださった方を後悔させない」「見るまで、辿るまで信じない」この三つの自戒のおかげで一度たりとも妥協せず御遺体に向き合うことができ、損壊にならないよう丁寧に解剖し人体の深淵を学ばせていただくことができたと思う。

先生が「どのような思いから志願なさったかが分かります」と教卓においてくださっていた会報を、ある日手に取り拝読した。生前に詠まれた短歌、医学生への願い、家族と過ごした日々、生老病死への考えといった会員の方々の生き生きとした随筆が掲載されていた。中には「傷を受けて満身創痍の身では役に立てないのではないか、そのようなことがないように願う」と不安を投稿している方もいらした。「とんでもない、何てことを仰いますか」と心の中で返事をしつつ、会員の方々の謙

虚さと偉大な叡智に感銘を受け、時間を忘れ読みふけた。

このような体験に満ちた密度の濃い日々は自分の死生・人間観に変化をもたらした。先哲の中には靈魂はなく生と死は物質の離合集散であると主張したものもいるが、解剖をしていると、どうもそのようには思えなかった。解剖が進み、御遺体の傷や状態がよくわかるにつれ、生前どのような生活を送っていたのか、何を楽しみとしていたのかと思いを馳せることが多くなった。御遺体の全体が、部分や要素に還元されていっても決してそれは単なる物質としてではなく御献体くださった方の遺志や願いとともに目の前に存在するように感じられた。

知ることは無知を知ることでもある。そのため、理解が深まる一方で反省の絶えない毎日であった。病理所見を記載する際や先生から問われる度に自分の無知に直面した。「こんなにいろいろなことを知らない若い医学生がこのような実習をしてよいのだろうか」と考えながら予習した日々を思い出す。教科書や先生方を頼りにすべてを見て触れることで学び、御献体くださった方

の遺志に応えようとする医学生達の姿勢によって御献体くださった方と御遺族の「献体になることを承諾する」という並々ならぬ偉大な決断に少しでも報いることができていることを願ってやまない。

先生方が繰り返し系統解剖学であることを強調してくださったために、基礎医学の各科目をまとめる形で解剖学を学ぶことができた。基礎医学を全力で学んだことが少し報われた。このため秋学期からの臨床医学への興味も高まり、どのように基礎医学が生かされるのかという期待で胸が膨らんだ。生涯にわたり医学を学んでいくなかで、体内まで見ることができるとはそうそうない。この実習を通して自分の中に人間の構造の原型を形作ることができた。このイメージが色あせないように、アトラスや画像を参照し、さらに学びを深めていく。

自らの遺志で御身体を提供することを決意し、またそれに承諾してくださった御遺族とその偉大な意志、日々実習の準備と知識の教授に尽力してくださった先生方に、この上ない感謝を申し上げます。

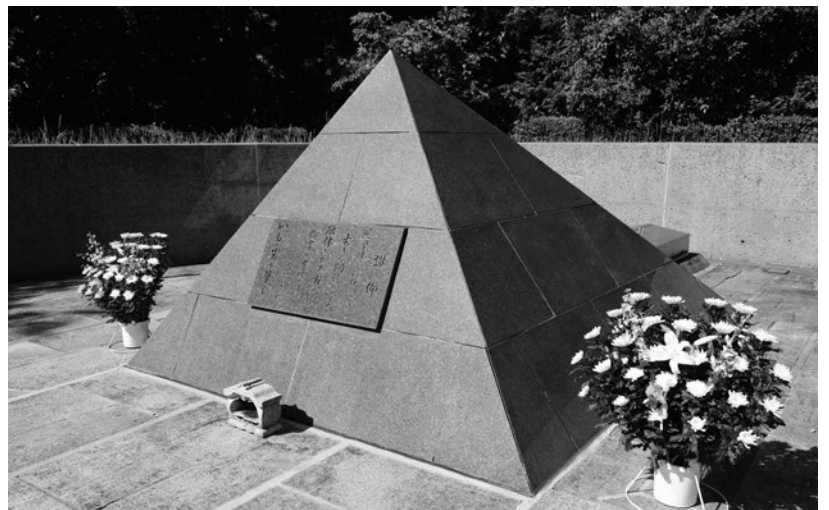
上 島 歩 羽

解剖実習が始まるまでの一年と数カ月、医学生として生化学、生理学、病理学、薬理学などの座学を通して人体の仕組みや医学について多くのことを学び、少しは成長してきたように感じていました。しかし、実際にご遺体と対面し、解剖実習を通して人体構造を学ぶ中で多くの課題に直面し、自分の知識不足を酷く痛感しました。同時により一層励み、最大限のことを学びとらせていただくことが、ご献体くださった方々とそのご遺族への私ができる一番のことだと考えました。

ご遺体に毎日黙祷を捧げる際、感謝とご冥福をお祈りするとともに、実習の始まりには今日も頑張ろうという決意、実習の終わりにはその日の貴重な時間を生かすことができたかという反省をするようにしていました。また実習時間に真剣に取り組むだけでは学びきれないと考え、参考書や3Dモデルを使って日々何時間も予習復習をしていました。時には今まで学んできた分野のレジュメを見返して、人体の構造が機能とどのように関係しているのかを結びつけてい

たり、手術や検査で行う手技には人体構造学的にどのような意味があるのかを考えたり、ご遺体に対面している時間の何倍もの時間をご遺体から様々なことを学ぶための土台となる勉強に充てました。この六週間は心身ともに負担を強いるものでしたが、それを乗り越えたこと、この期間で集中的に学んだことは今後、医学生として、医師として研鑽を重ねていく姿勢を作る上でも大きな第一歩となったように思います。

実習の締めくくりとなる納棺の日、ある先生に、医療は手術にしても投薬にしても患者さんの体に手を加えることであり、それによる害と治療効果と天秤にかけていく行為であるという話をしていただきました。私たちがこれから患者さんに医療行為という形で手を加える権利と責任が本格的に生まれるのは医師となつてからになります。それまでには知識と経験とそれを培うためのまだ長い年月が必要になってくることと思います。しかし、机上で学ぶだけでは人を診ることもその覚悟もいきなりは身に付けることができません。それらのための学習の一つとなる人体解剖実習は、初めて未熟である私たち医



白菊会慰霊塔

学生に許される、一般の方が行うことのできない特別で特殊な行為だと考えます。ご献体くださった方々とそのご遺族、準備と指導をしてくださる先生方、本来、一般には許されることのないご遺体に手をつける行為を行う権利を保障する法律など、多くの協力によって実現されたことを自覚し、この貴重な経験で学んだことをこれからも生かし、学習の積み重ねを続けていきます。

最後にご献体くださった方々とご遺族に深い感謝を申し上げます。誠にありがとうございました。

木村 彩 香

GW が明け漸く初夏の兆しが見えてきた頃、六週間の解剖実習が始まった。六週間は長いようで短く、あっという間に過ぎた。毎日の予習と実習、復習で、体力的に辛い時期もあったが、この解剖実習を最後までやり切ることができたのは、友人や先生方の支えがあったからである。コロナ禍において解剖実習を最後まで行うことができたこと、そして、本実習をサポートしてくださった全ての方々に、心から感謝したい。

解剖実習を行う中で、私には、身に染みて感じたことがある。それは、膨大で巨大な医学の世界において、自分がいかにちっぽけな存在であるかということである。基礎医学の学習を終えた段階でそう感じるのは遅いだろうと自分でも思うが、今までは、授業や教科書で膨大な医学知識に触れても、自分がそれを活用していくイメージがどうして

も湧かなかった。しかし、解剖実習では、知識がないと何もできなかった。作業する手を動かすことすらできなかったのである。実習の手引きはわからない単語ばかりで、アトラスを参照しながら読み進めるのは、非常に時間がかかり苦しかった。自分の医学知識の浅さを痛感させられた。そして、実習では、サポートしていただいた先生方や六年生の先輩方の持つ膨大な知識量に触れ、圧倒させられた。目の前で先生が解説してくださったときや実習前のショートレクチャーのとき、私は自分の存在の小ささを痛感するだけでなく、先生方の医学に対する謙虚な姿勢に深い尊敬の念を覚えた。私から見れば解剖の知識のほぼ全域を掴んでいる先生方も、ご遺体の状態について分からないことがあればアトラスを参照し、学生と一緒に考えて考察していた。先生方の医学に対する膨大な知識は、その謙虚な姿勢から生まれるのだと感じた。そして、私は医学生として、巨大な医学の世界のほんの一部しか掴めていないが、これからどんなに知識を身につけても、先生方のように自分の知識に慢心せず、謙虚な姿勢で勉強していこうと心に決めた。

最後に、解剖実習に医学生として参加できたことが、とても恵まれたことであることを忘れてはならないと思う。コロナ禍で世界が一変してしまっても、変わらぬ学習の機会を下さった筑波大学に、そして何よりも、ご献体くださった方やそのご家族の方々のご意志に心から感謝している。この解剖実習で、医学生として医学の世界にやっと踏み込んだという感触が湧いた。その世界は思っていたよりもずっと巨大で膨大だったが、それだけ面白く、私の気持ちを強く揺さぶるもので溢れているのだろう。本実習で勉強させていただいたことを忘れずに、これからも巨大な医学の世界を、強い意志と向上心、そして謙虚な姿勢を持って突き進んでいきたい。

向 後 綾 乃

私は臨床検査技師を養成する学類を卒業したのち、医学類に二年次から学士編入で入学した。以前の学類では解剖は行えず見学のみであったので、解剖実習が始まる前は、いよいよ医学生としての勉強が始まるという期待や高

揚感があつた一方で、人を解剖することへの恐怖心や不安を感じ、またしっかりと勉強しなければいけないと身が引き締まる思いであつた。

解剖実習初日、実習室にはビニールに包まれたご遺体がたくさん横たわっているのを見て、何とも言えない恐ろしさを感じた。ご遺体のビニールを取り初めて拝見した時、これからこの方を解剖するという現実には、この感覚は一生忘れることがないといえるほどの緊張と恐怖を感じた。初日の解剖はおそろおそろ進めたが、お顔を拝見することはできなかった。

解剖実習を進めるにつれて徐々に慣れ、うまく剖出ができるようになるとともに、教科書や図譜に記載してある構造などを実際に確認できた時、人体の神秘に感動を覚えた。さらに実習が進んで内容が複雑になってくると、予習量が多いことや、予習したにもかかわらずいざ実習をしようとする、教科書や図譜の通りでないこともあり、自分が何をすべきかわからなくなるといことがあつて、自分の無力感やご献体してくださった方への申し訳なさから精神的につらいと思うことも多々あつた。解剖は実習時間も長く、さらにストレスか

ら朝早くに目が覚めてしまうこともあり、身体的にもつらかつた。土日は予習、復習と試験勉強に追われ、ほぼ開館から閉館まで図書館にこもつて勉強した。このように日々を過ごしながらなんとか六週間の実習期間を乗り切つたが、実習ではやはり多くの学びが得られ、ご献体してくださった方への感謝の念が日に日に増していったように思う。

実習最終日に、先生から「患っている病気は同じかもしれないが、患者の体の中で起こっていることは厳密には一人一人違うはずだ」とお話があつた。振り返ってみると、剖出や観察が教科書や図譜の通りにいかないこと、ご遺体の脂肪の付き方、臓器の大きさ、血管分岐の変異や破格など、本当に一人一人異なつていて、確かに先生のお話の通りだと理解できた。このことから、医師になつた際に病気ではなく、患者個人と向き合うことの大切さや、学び続けることの重要性を実感でき、身の引き締まる思いである。

解剖実習を終えた現在はこれから学習する内容の予習を行っている。以前の学類にいた時の講義などで聞き覚えのある疾患について勉強することもあるが、実習を終えた今では理解度が圧倒

的に違うことを実感している。毎日の実習や勉強の中で、着実に知識が身につつき成長できていたことを嬉しく思うとともに、医学生としての自覚がわいてきたと感じている。

実習では、「解剖実習での一番の先生は教員ではなく目の前のご献体してくださった方である」とのお話があつた。実習を通して、医学的知識を身につけるだけでなく医学生としても成長できたと思うので、本当にご遺体が一番の先生であつたと実感するとともに、ご献体してくださった方とご遺族に感謝の気持ちで一杯である。この感謝の気持ちと実習で学んだことを忘れずに、立派な医師になるべく医学生として学び続けたい。

小林 愛 歌

解剖実習を終え、六週間の日々を振り返ると、初日のことを鮮明に思い出します。重い曇り空に何とも言えない不安な気持ちを抱えて自宅を出発したこと。普段と空気感の違うロッカールームで、友人と頑張ろうねと声を掛け合つたこと。いざ足を踏み入れた解剖実習

室をつつむ緊張感。そしてご遺体に供えられた白菊を目にし、ご献体くださった方は尊い命を全うされた「人」なのだ、故人の尊い遺志に全力で応えなければならぬと強い責任感が生まれたこと。

始まる前は、自分がこれから解剖実習に取り組むという事実は少しも現実味が無く、また六週間という期間は途方もなく長く感じ、乗り切る自信もありませんでした。しかし、いざ始まると驚きと発見に満ちたかけがえのない体験であり、時間はあっという間に過ぎていきました。終わりの時間はいつも十七時と定められていましたが、十二時過ぎから開始の日にはもの足りなさを感じたほどです。

私が医学の道を志した動機のひとつに、人体の神秘に触れたいという思いがあります。医学を学び始めてから解剖実習ほどその思いを満たす体験はありませんでした。小学生の頃から私を惹きつけてやまない精巧で合理的な人体のしくみ、臓器や器官のつくりを実際に目にし、細部まで追求できることの感動は言葉では表現しがたいものでした。実習で見たもの、得た知識、ご遺体から学ばせていただいた全てのことを鮮明に記憶で

きたらと何度願ったかわかりません。

剖出の中でもいくつかの場面が特に印象に残っています。そのひとつは前十字靱帯です。靱帯と筋肉と脂肪を慎重に取り除く作業を続け、深部まで現れているのに前十字靱帯が見えずあきらめかけていた時に、先生から膝を曲げて観察をしてみるようご指導いただき、実際に曲げてみたところ初めて前十字靱帯の末端部が露わになったのです。達成感がこみあげてくるのを実感しました。また、下顎管を開く手順もよく覚えていきます。ノミと木槌を使いこなすのは難しく、繊細さと根気を要し、また、骨片のひとつ欠けで剖出の成功と失敗が分かれてしまうような作業でした。二時間近くかかり、薄く下顎骨を削り、赤い骨髓の合間から白く光る神経と血管の束が見えたときの感動が忘れられません。

こうして振り返ると、解剖実習が医学を学んでいく上でいかに貴重で重要なものであったかに改めて気づかされます。解剖実習を終えた私たちに先生は「おめでとう」と声をかけて下さいました。この実習が医師になる道の実質的な第一歩であるからだ。これらの学びを解剖実習での学びにつなげ、

重ね、深めて、医師になってからも活かせるよう、精進していきたいです。

最後になりましたが、ご献体してくださった方、そのご遺族の方々、そして実習の準備や指導をしてくださった先生方、今回の解剖実習に関わってくださった全ての方々に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

高澤 秋人

実習初日の朝、慰霊塔を訪れた。そこには「医学徒にはげましと大きな期待を寄せて献体された方々の御霊を永遠に讃えてここにいしぶみを築く」と刻まれた碑があり、お花が供えられていた。「今日から解剖実習をさせていただきます、よろしくお願いします」と心の中で言った。

実習室に入ると、今まで感じたことのない空気だった。しばらくの間、ご遺体の前でただ立ち尽くしていた。実習が進むにつれてその空気感は薄くなっていった。慣れとは恐ろしいものである。ただ、慣れることと、想いが薄れることは全く別のことであると思

う。将来医師になっても慣れという言葉で片付けたくない。

将来は外科医になりたいので、解剖実習はずっと前からやる気に満ちていた。どうにかしてこの経験を将来に活かしたいと思っていた。しかし、手引きの手順通りに血管や神経、筋、臓器などを一つ一つ確認していく作業をどう外科に繋がたらよいのかわからずいた。そもそも外科の手術が具体的にどのように行われるかを知らなかったことも原因だと考えられる。そこで「どういうところが手術に繋がるんですか？」と、実習中に六年生の先輩に尋ねてみた。「たとえば胃の手術をするときどの血管を結紮すればよいか？」と言われ、なるほどなあと考えた。きつと実習のすべての経験が何かしらの形で生きてくれるのだと思う。例えば、人間の構造は教科書通りのものとは限らず個人差があふれていることや、図や写真を見るだけでは掴めない立体的な位置関係を学んだことなどだ。

実習最終日、最後に先生がお話をした。その話を聞いて、ご献体された方々とそのご遺族の方々の決断はとても勇気の必要なものだったと改めて痛感し

た。正直言うと、もし私の家族が献体すると言ったら、快諾できる自信がない。その決断ができたのは、私達医学生に大きな期待を寄せているからで、私達はその期待に応えるべく生きる。

納棺した後、再び慰霊塔を訪れた。碑に刻まれた言葉が初めて目にした時より何倍も心に刺さった。

解剖実習を終えて、私達医学生がどれほど期待を寄せられている存在なのかを実感した。また外科医になって多くの人を救いたいという思いが強まった。これからも、その期待に応えるために勉学や生活に励みたい。

最後に、ご献体された方々、ご遺族の方々、この実習の準備をしてくださったすべての関係者の皆様、そして実習を共にした友人達、本当にありがとうございました。

藤澤 和 成

新型コロナウイルス感染症による様々な制約がある中、五月十日から六月十八日にかけて計六週間にわたる解剖実習を無事終えることができた。予



令和元年度慰霊塔（参拝）

習・実習・復習に追われる日々だったが、毎日が驚きと感動の連続であり、非常に密度の濃い時間を過ごすことができた。

解剖実習の初日、実習室に近づくにつれて緊張感が高まっていた。実習室に入ると、そこには数十体のご遺体が静かに眠っていて、厳肅な雰囲気が漂っていた。私はその日から六週間にかけて人体の構造を教えてくださいださるご遺体の

前に立ち、一度深呼吸をした。ご遺体を前にして緊張はしていたものの、一切恐怖を感じることはなかった。むしろ、ご献体くださったご本人およびご家族の方々の尊い意志に対する尊敬の念と、これから始まる精緻な人体への冒険に胸が躍る気持ちで一杯だった。

解剖実習は黙祷に始まり、黙祷に終わった。この時ばかりは感謝の念や敬虔な気持ちで胸が一杯だった。実習を通して人体の構造を見ていく中で、教科書やアトラスに載っているものと実際のご遺体はかなり異なっていることをつくづく思い知らされた。教科書やアトラスは人体に見られる平均的な構造をまとめたものであり、個人間のわずかな差異は切り捨てられている。また理解しやすいように筋肉や神経・血管等は別々に描かれていることがある。しかし、実際の人体では個人差が必ず存在する上、筋肉や神経・血管等は互いに繋がり合っていて、それ以外の場所には脂肪や結合組織が隙間無くびっしりと詰まっている。このことから、教科書で学んだ知識は非常に大切だが、それ以上に、実習を通して頭の中にある知識を実物で応用することが必要不

可欠であることを実感した。また医師として、単に検査値に基づいてマニュアル通りの治療を行うのではなく、それぞれの患者さんのわずかな違いを見抜きながら適切な治療を施すことが大切だと思った。

解剖実習の最終日、納棺式が行われた。納棺の作業を行っている際に、私は改めてご遺体から人体の構造について隅々まで勉強させて頂いたと感じた。また棺の中にご遺体を移動させる際には、ご遺体の重みがひしひしと伝わってきた。ご献体くださった方が過ごしてきたこれまでの人生の重み、ご本人およびご家族の尊い意志の重み、そして私たち医学生が立派な医師になることへの期待の重みが加味されているのだろう。一人前の医師となり、病気に苦しむ患者を生涯にわたって救い続けることがご献体くださった方に対する唯一の恩返しであると思う。

最後に、ご献体くださった方々およびご家族の方々、実習の準備や指導をしてくださった先生方、共に学び合った班員の方々、その他解剖実習にご協力頂いたすべての方々に、深く感謝申し上げます。

藤田 琴奈

六週間におよぶ解剖実習は、貴重な経験をさせていただき、たくさんの方々とを学ばせていただいた実習だった。初日に実習室に入った時の冷たい空気と緊張感から、最終日に解剖台を掃除して納棺したときの寂しさまで、全てが私にとって忘れられない経験である。

長丁場だと思っていた解剖実習だが、膨大な知識量に追われて時間があつという間に過ぎていくことに気づいた。ご遺体を前に学べるこの貴重な時間を無駄にはできないという一心で、毎日必死に勉強した。居残りで実習できる時は最後まで残り、その後も学校に残って班員と次の日の予習を行い、帰ってから実習書とアトラスを読む、という生活。休みの日ですら学校には誰かしら勉強している仲間がいて、知識を交換し合った。ふと疑問に思ったことがあれば、すかさず先生や仲間に質問し、疑問を残さないように心がけた。六週間の間ずっと勉強のモチベーションを保っていたのは、実習期間中一緒に勉強してくれた仲間や、どんな質問にも答えてくださった先生方のお

かげである。

初めの頃は実習を進めることで頭が一杯で、構造が見つからなくて先生を頼ることが多く、教科書通りではない構造があることにもどかしさを感じていた。しかし実習を進めていく中で、教科書とは違う構造の観察に意味があることを理解した。時には他の班のご遺体の様子も見て、構造は違っても、それぞれご献体くださった方が生きるためのシステムが確立されていることに感動した。また一度教科書に載っていない構造を見つけて先生に質問した時、先生が「勉強になりました、ありがとう」とおっしゃっていた。その時、先生もまだ学びを続けている最中なのだという事に気づかされた。経験を積んでいつでも見たことのない構造に出会うことがあり、こうした学びを一生積み重ねていくのが医学という学問なのだと実感した。

また解剖学は人体のいわば完成した形を学ぶ学問だが、どのようにしてその形になったのか、という発生学の知識や、さらにどういった構造の異常がどのように病気を引き起こすのか、という臨床に絡んだ知識も先生や先輩に

たくさん教えていただいた。これらのおかげで、解剖学で学ぶ構造をより深く、より効率よく理解することができた。人体がいかに生きるために理にかなった構造をしているのか。これらの知識が臨床現場においてどのように必要になってくるのか。知れば知るほど面白い知識ばかりだった。

実習で剖出した構造の中で一番感動したのは神経である。指の太さほどもある坐骨神経から、細い皮神経まで、体の隅々まで神経線維が分布しており、これが全身を動かしているということに人体の神秘を感じた。実習の終盤で顔の構造を剖出するようになると、居残り時間などの空いた時間はもっぱら脳神経の剖出をしていた。最終試問で「好きなどころを説明してください」と言われた際には、先生が目に入らなくなるくらい脳神経について語り尽くした。この感想を書いている今でも、脳神経を剖出していたときの感動が蘇ってくる。

今回このような心に残る経験をさせていただけしたのは、ご献体してくださった皆さまとご家族、先生や先輩、班員、多くの方の協力や支えがあつて



令和元年度慰霊式（献花）

のことである。本当に皆さまには感謝しても足りない。解剖をさせていただいた以上、私たちにはこれから医学生として懸命に勉強する責任がある。この実習で経験したこと、感じたことをこれからも忘れず、尽きることをない医学という学問を、一生をかけて学び続けていきたいと思う。

山野 尋生

今回の解剖実習を通して、様々なことに關して考えを改める、また深めることになった。

まず、医学という学問に対する見方、考え方が変わった。実習には、毎回教科書やイラストを用いて予習した上で臨んだが、実習中には予習していても分からないことが沢山出てきた。実習の最終日に先生が、教科書的な医学の知識と、実際の人間の状態にはギャップがあり、その差を理解していくことが医師としてのレベルアップに繋がる、と話していたが、本当にその通りだと感じた。医学は、抽象的で揺るぎない理論や知識を学び、それを基に問題を解く、といった高校生までの学習形式とは異なることを肌で感じた。実習を通して、医学という学問の奥深さに気づき、そして人体の神秘にとっても興味が湧いた。今回得た気づきを、これからの医学を学ぶ中で活かしていきたいと思う。

また実習を通して自分の中に、将来の医療従事者としての自覚と責任感が生まれてきたように思える。思い返し

てみると、解剖実習を行うまでの、主に座学の医学の勉強では、少し妥協してしまうこともあったように思える。膨大な医学の知識を前に、こんなに覚えるのは無理だとか、テストに出なそうだから覚えなくてもいいか、といった具合に主観的で低次元な言い訳をして、勉強から逃げてしまうことが少しあった。だが、解剖実習で実際にご遺体を前にして実習を行っている、自分、即ち医学生に対する世の中の人達からの期待を強く、そして重く実感し、以前の妥協してしまっていた自分がとても恥ずかしく思えた。そして、見えている所でも、見えない所でも、自分が将来医師として働くために助けてくださっている方々が沢山いることを改めて感じ、将来自分を待つ患者さんは勿論のこと、そうした支援をしてくださる方々の為にも、期待を裏切らないよう日々自己研鑽をしなければならな

いと強く心に思った。将来医師になる立場として、その自覚と責任感を忘れずに、今後の医学部生活を過ごしていきたいと思う。

また実習全体を通して、命というものに思いを巡らせることが多くあった。

ついこの間まで、自分たちと同じこの世で生きていた方々と実習を通して関わることで、命あるものは必ずいつか死んでしまうということを改めて感じさせられた。その上で、健康であることがどれだけ恵まれていて運が良いことなのか、といったことをこれまでよりも強く感じた。そして、医師として患者さんの病気を治すということは、患者さんにとってどれだけ大きな意味を持つのか、またどれほど重大な出来事なのか、といったことを考えさせられた。命の尊さに思いを馳せて、人を救う為に必要な努力をこれから全力で続けていこうと思った。

約六週間に亘る解剖実習だったが、かなり多くのことを学ぶことが出来た。得られたことを大切にして、自己成長に繋げていきたいと思う。



新
会
員

会員番号	氏名
二四〇一	佐々木 道子
二四〇二	櫻井 輝男
二四〇三	平山 裕子
二四〇四	比嘉 好子
二四〇六	稲田 均
二四〇七	奈良橋 健
二四〇九	宮崎 幸子
二四一〇	本木 恵子
二四一一	渡邊 明美
二四一二	宮田 英津子
二四一三	黒澤 いね
二四一四	安留 幸子
二四一五	菊地 篤子
二四一六	北之馬 陽子
二四一七	吉田 千恵子
二四一八	平沢 静男
二四一九	平沢 文江
二四二〇	浅木 敏夫
二四二一	香田 澄子
二四二二	福田 光枝
二四二三	栗崎 キミエ

二四二四	代田 一郎
二四二五	平野 恵美子
二四二六	森田 三郎
二四二七	森田 征子
二四二八	清水 幸一
二四二九	栗原 実
二四三〇	武田 信男
二四三一	竹内 吉晴
二四三二	飯島 次男
二四三三	高瀬 奈美
二四三四	鈴木 セツ子
二四三五	飯沼 糸子



成願会員

会員番号	氏名	成願年月日
五九一故	小林 隆夫	二・九・一六
五七三故	小幡 修子	二・一〇・一二
一六〇八故	龍 寛二	二・一一・九
四八八故	鈴木 幸子	二・一一・一〇
二〇四七故	入井 伸介	二・一一・一二
二四〇八故	宮崎 昭義	二・一一・一七
一八七六故	谷口 登美	二・一一・二六
六九六故	川端 久子	二・一二・九
二四〇五故	加藤 信夫	三・一・七
二二六二故	田村 孝	三・一・一二
二三五八故	松本 祐一	三・二・一五
二二四一故	荷見 睦子	三・二・一六
一三四二故	佐藤 隆司	三・二・二三
一一六八故	中川 霞子	三・三・七
一〇四二故	軍司 幸壽	三・三・一〇
一九六四故	山岸 義孝	三・三・二二
一五二九故	松葉 好子	三・三・二二
一七九〇故	菊池 直行	三・四・六
一八八一故	岸 洋子	三・五・一三
二〇一九故	森木 雅利	三・五・一八

一一五四故	櫻井ノリ子	三・五・二二
一三九五故	加藤 利勝	三・五・三一
一八五八故	手塚 秀征	三・六・二
一七一〇故	原田 千里	三・六・九
三四〇故	千葉 俊子	三・六・二四
一八四九故	鈴木 妙春	三・七・五
一五一四故	綿引 弘子	三・七・八
一四八八故	内山 至	三・七・三〇
六二五故	山川 いね	三・八・三
一三三八故	伊山 正夫	三・八・一三
一六五六故	明石 玲子	三・八・二〇



筑波大学白菊会 規約

(名称及び事務所)

第一条 本会は筑波大学白菊会と称し、その事務所を筑波大学医学群内に置く。

(目的)

第二条 本会は会員の親睦と献体運動の推進を図ると共に、医学の発展と人類の福祉に貢献するために、会員の遺体を筑波大学医学群に寄贈することを目的とする。

(事業)

第三条 本会は前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- 1、 会員の親睦
- 2、 献体運動の推進
- 3、 会報の発行
- 4、 その他、本会の目的を達成するために必要な事業

(会員)

第四条 本会の目的及び事業に賛同し、自らの遺体を寄贈する目的を持って入会を申し出た者を会員とする。ただし、家族、またはこれと同様の者の同意を得た者でなければならない。会員は本人の希望により退会することができる。

(役員)

第五条 本会に次の役員を置く。

- 1、 会長 1 名、理事長 1 名、理事若干名、幹事若干名
- 2、 会長は、筑波大学医学群長が務める。
- 3、 理事は、筑波大学医学群解剖学担当の教員が務め、理事長の選出は、理事の互選による。
- 4、 会長は本会を代表し、会務を総理する。
- 5、 理事長は会務を統括し、理事は本会の運営に関して協議し会務を分担する。
- 6、 幹事は筑波大学医学群の事務職員の中から、会長が委嘱し、庶務及び会計を処理する。

(任期)

第六条 役員の任期は 2 年とする。但し、再任を妨げない。

(顧問)

第七条 本会に顧問若干名を置くことができる。顧問は、理事会の議決により、会長がこれを委嘱する。その任期は 1 年とする。但し、再任を妨げない。

(会議)

第八条 総会は、年 1 回会長が召集し、事業報告及び会員の意見交換の場とする。

(会計年度)

第九条 本会の会計年度は、4 月 1 日から翌年 3 月 31 日までとする。

(経費)

第十条 本会の経費は、寄付その他の収入もってこれに充てる。

(補則)

第十一条 この会則に定めるものの他、本会の運営に関して必要な事項は、理事の同意を得て会長が定める。

(感謝状)

第十二条 献体された遺族に対し、会長（医学群長）より感謝状を交付する。

付則

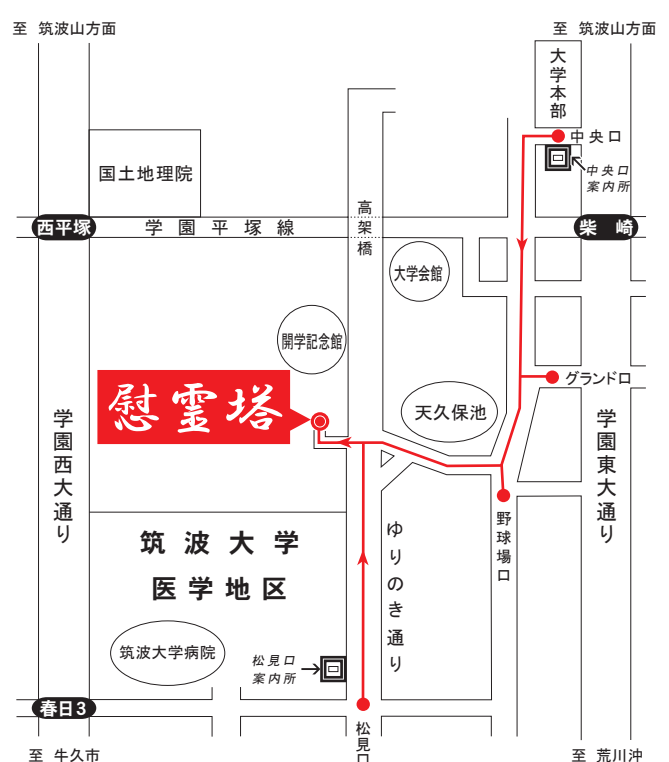
この規約は、昭和 58 年 4 月 1 日から施行する。

この改正規約は、平成 24 年 4 月 1 日から施行する。

筑波大学白菊会慰霊碑案内図



筑波大学白菊会慰霊塔案内図



(交通ご案内)

車利用の場合 (常磐自動車道)

- 土浦北I.Cから15分
- 桜土浦I.Cから23分

高速バス (つくば号) 利用の場合

- 東京駅八重洲南口 (②のりば) から「筑波大学行き」乗車
～つくばセンターまで70分

鉄道・バス利用の場合

- 常磐線土浦駅西口 (③のりば) 関東鉄道バス「つくばセンター行き」乗車～つくばセンターで下記のつくばバスに乗り継ぎ
- つくばエクスプレス (TX) つくば駅隣接のつくばセンター (③のりば) つくばバス・北部シャトル「筑波山行き」乗車
～「大穂窓口センター」下車

(所在地) 〒300-3253 茨城県つくば市大曾根根本333

(お問い合わせ) 029 (864) 6606

・お車でお越しの際は、上記の所在地あるいは電話番号をナビにご入力願います

(交通ご案内)

車利用の場合 (常磐自動車道)

- 土浦北I.Cから20分
- 桜土浦I.Cから20分

高速バス (つくば号) 利用の場合

- 東京駅八重洲南口 (②のりば) から「筑波大学行き」乗車
～つくばセンターまで70分

鉄道・バス利用の場合

- 常磐線土浦駅西口 (③のりば) 関東鉄道バス「筑波大学中央行き」乗車～「平砂学生宿舎前」下車
- つくばエクスプレス (TX) つくば駅隣接のつくばセンター (⑥のりば) 関東鉄道バス「筑波大学中央行き」または大学循環バス (右回り) 乗車～「平砂学生宿舎前」下車

お願い

ご住所を変更された場合は、新しい住所を白菊会事務局（電話 〇二九―八五三―三三三）へお知らせ下さい。住所が分からずご連絡がとれないケースが増えております。



「会員が亡くなられた時に、していただくこと」
ご遺族の方々へのお願いです

一、ご遺体を大学へ引渡す時刻の打合わせ

まずご遺族の間で次のことをお決めになって下さい。

(1) お通夜をせずに直ちに引渡す

(2) お通夜をしてから引渡す

(3) お通夜をして告別式をすませてから引渡す

右のうちどれかにきまりましたならば筑波大学献体事務室の担当者（電話 〇二九・八五三・三三三〇）と、ご遺体引渡しの場合と時刻を打合わせてください。休日・夜間のお引取は大鵬社（電話 〇二九・八二二・八三三三）に直接連絡下さい。

ご遺体の輸送は大学がお引受けし、原則として自動車がお迎えにあがりますし、(1) の場合には必要があれば大学からお棺を持参することになっていますがこの点も打合わせて下さい。

（注）ご遺体の大学への引渡しが二十四時間を超えるときはお棺の中へドライアイスを入れ、ご遺体の保存に御留意下さい。

二、必要書類の用意

(1) 「埋火葬許可証」を急いでお取り下さい。これは医師の死亡診断書をそえて市町村役場へ「死亡届」を出すときにもらえます。

(2) 「埋火葬許可証」の記入の際、火葬場所は県内の方は最寄りの火葬場所をご記入願います。尚、県外の方は土浦市田中二丁目一六番三三号、土浦市営斎場、火葬年月日は一年後として下さい。

(3) 「解剖に関する遺族の承諾書」については大学から書式を持参しますので、ご署名とご捺印をお願いいたします。